

# 特集——海と島の日本・VIII

- ・海の文化——島の文化  
石原義剛……………31
- ・「世界ジオパーク」登録をめざして  
野辺一寛……………46
- ・八丈産のムロアジをミンチ加工品に  
岡本圭祐……………54
- ・アマ・ヤマ・シマ・イマにおける人とチカマンとの交通  
菅田正昭……………60

# 海の文化、島の文化

## 島々の記憶から

文・写真 石原義剛

七〇〇〇ちかい島々からなる島国日本。個々の歴史や文化、景観はもちろん、そこに住まう人たちの気質もそれぞれに異なっており、そうしたユニークさの根底には島をとりまく海の存在がある。島に豊穡をもたらし、時には荒れ狂って人命を奪うという海の両面性が島々の個性を、そして「日本群島」の気質を形づくっているのではないか。天草諸島、菅島、佐渡、軍艦島、大崎上島、奄美大島、八丈島など、かつて訪ねた島々の記憶から、「海と島の国」の在り方を考える。

― 初めての旅、大きな島・九州へ

― 菅島のテレビ結婚式

― 「小木民俗資料館」を訪ねて佐渡へ

― 棄てられた島「軍艦島」へ

― 大崎上島、素晴らしき船こぎ競漕

― 八月踊りの奄美大島へ

― 八丈島に遊ぶ

― まだ続く島々の旅

大戦中、父親の郷里・志摩半島の海で多くの時間をすごした。当時、砂利道をのろのろ走るバスはあったが、時間をはかるし排気ガスで車酔いするから、小島の点在する<sup>あ</sup>虞湾を巡航船に乗るほうが楽でたのしかった。そこは陸の孤島同然であった。住まいは伊勢神宮外宮の神苑の隣にあったが、戦争中は鳥羽の海岸に臨んだ小さな別荘に疎開していて、毎日、海を遊び場に、海と一緒に暮らしていた。だから島を陸<sup>りくど</sup>と区別して、特別の場所という感じを持ってはいなかった。

旅をするようになって、長い間にずいぶん多くの島を訪れたと漠然と思っていたが、数えてみたら八〇ほどであった。日本群島にはおよそ六八〇〇の島があり、うち四二〇ほどが有人の島であると聞いているから、わずか八〇しか行っていないと、少なさにいささかがっかりした。『旅する巨人』宮本常一さんは四二〇余の大半を、それも交通不便の時代に訪ねたというから、驚嘆するばかりだ。

訪れてみると島はいつも面白く、立ち去り難い思いがあった。島そのものの自然景観の違いはもちろん、歴史や文化を映しだしている集落と習俗、産業。漁船の舫う港の風景、そしてなによりも住む人々の気質が島それぞれに個性を持っている。そんな島々の個性の集まりである『群島日本』の面白さがここにある。

そこで、島の記憶をいくつか、たどってみることにした。

## ――初めての旅、大きな島・九州へ――

一九五八年、大学は文学部に入ったが、一年の終わりの春休みに初めての長い旅に出た。郷里・伊勢で子どものころからの友、T大文学部哲学科のIと一緒に。面白い奴だが我が強い。必ず衝突するとお互いに判っていたから、行き先を一日ずつ交代で決めると約束していた。一週間ほどの日程で九州を一周する予定であった。

冬休み中アルバイトをし、稼いだ金額と同額を父親はくると約束していた。このありがたい約束のお陰で大学の四年間、いい旅ができたのだが。

九州は博多から旅ははじまった。どういう行程を経たか、二人が学生服と背広を着た姿で写っているアルバムによると、阿蘇から、耶馬溪を過ぎ湯布院へ出て泊つたらしい。田園の真つただ中の古き良き湯治場・由布院の写真が残っている。その後、豊後竹田、阿蘇（相棒の行き先決定日で二回も阿蘇に付き合わされた）、高千穂。

そこからやつと海へ出た。宮崎から新婚旅行のメッカ日南海岸は鬼の洗濯板の青島や、海の神を祀る鶴戸神宮を経て志布志へ。桜島から鹿児島を経て、薩摩半島の先端、山川港へ。山川港では目の前で大隅半島の佐多岬へ渡る連絡船に逃げられた。そこで指宿<sup>さしゆく</sup>へ。指宿では足の先で波が打



天草の漁港。



天草の  
キリシタン教会。

ち寄せる砂浜の砂風呂なるものを経験した。目の前の海の上に、茶碗を伏せたような開聞岳があった。海から山が突っ立っている見たことのない風景。長くバスに揺られ、枕崎を通って九州の南端、日本三津の一つ坊津ぼうづに泊る。鄙びた港町だ。宿のおやじは田舎文人らしい身なりをしていて、学生風情の私たちにやけに親切だった。夜は酒を一緒

に飲みながら中国に連なる坊津の歴史を語り、馬祖の話をし、翌日は船で海を案内してくれた。

そこからどういったのか覚えはないが、与謝野鉄幹ら五人の「五足の靴」のあとを辿って天草へ渡った。天草ではキリシタン教会堂が違和感なく海に馴染んでいた。泊った温泉宿の一泊一四五〇円の領収書がアルバムに貼ってある。

その後、長崎を観光して旅を終えた。

阿蘇と高千穂で山を経験したあとは、毎日、海岸線を見ながら歩いた九州の旅だった。

それまでの私は疎開した母の郷里である滋賀のほかは、住む伊勢・志摩の海、父が連れて行ってくれた東京という大都会と、東海道線の車窓から見る風景以外を知らなかった。さまざまに異なった自然海岸の景觀、人のいる漁村の風景はどれも親しいながら物珍しい初めての経験だった。こんなに知らない海があるのか。こんなに多様な景色が日本にはあるのか――。

九州はでかい島を歩いた印象が強が残った。ちなみにこの島は日本で三番目に大きく、一三〇〇万人が暮らす。

五〇年前、共に旅をしたIは今春に天国

へ去ってしまった。

## 菅島のテレビ結婚式

一九六六年一〇月。当時わたしは名古屋にあるテレビ局のスポンサー担当の営業マンをやっていた。徳川無声と中村メイコ、この二人が司会と仲人役をする結婚式の生中継番組の放送で、三重県鳥羽市の離島・菅島へ渡った。

巡航船が着くと島人の群れが押し寄せる。当時はまだテレビ受像機が島に三台しかなく、中継など稀なもの珍しい時代であった。そこへ有名人が来たのだからたまらない。島は大騒ぎとなった。私の記憶にはまったく抜け落ちていたが、その結婚式場は砂浜だったそうだ。

一九六九年に、私はテレビ局を辞めて郷里・伊勢へ帰り、「博物館屋」になったので、その後たびたびこの島を訪れることになる。伊勢湾口にある菅島は周囲わずか一三キロ、住人七〇〇。ここは海女の島である。夏前、海女の漁はじめの「口明け」行事である「しろんご祭り」は、今ではめっきり海女は減ったが、写真家の群がる祭りになっている。その番組「ここに幸あれ」第三八二回で結婚式を挙げたのはK夫妻。当時二四歳だった。四二年ぶりに菅島で二人に会って、記憶から消えていた当時の様子を聞いた。

二人は同級生、ということは島育ちの幼馴染だった。二



さいの放念  
下での記  
木っの  
の持と  
の婚式  
菅島が  
んが結  
送本  
台  
写  
真。

人とも夏場はアマをした。彼は潜りが上手でアワビを獲ったが、結婚後、親の仕事を継いで安定した商売の左官になった。親がまだ四〇代で若かったから同居も嫌で、出稼ぎに島の外へ出て仕事をした。菅島というところはあまり出稼ぎのなかった島なので「わしらが初めてのほうやろ」という。かあさん（妻）も連れていって飯場で一緒に暮らし。博打はなんでもやった。競艇、競輪、麻雀、パチンコ。「女遊び以外は」という亭主に妻はニヤリと笑った。二〇年ほど前、そろそろ仕事も少なくなってきたし、親父の面倒も見なあかんで帰ってきた。いまは毎日、日がな一日釣りに出る。

彼は漁師ではないので漁業のことを深くは知らないが、「島は豊かになつとらん」という。漁業は船や機械に金がかかる。陸（島の外）に持つてる車にも金がかかる。

それでも島は暮らしよい。家族もいるし、兄弟

もいる。みんな顔見知りだ。夕方になると誰かがサカナをおいてくれる。島のみんなが親戚みたくである。

孫が来て「爺ちゃんのサカナ食うとボク元気になるわ」と言ってくれるのが嬉しい。「子どもは島で育てたけど、わしは左官屋で、出稼ぎで何日も家を空けた。日頃子どもと顔合わさん。それで一週間に一度は子どもと外食した」。それが一番の娯楽だったという。

「今日はお飯作りたくない、思うことあるやろ、それでも食事に島の外へ出られへん」。そんな時「橋があったらええのに」と奥さんはいう。なんでもないことだが、娯楽の少ないことが苦しいのだ。陸の人間には分からぬ悩みである。

いろんな事情が重なって、島から若者が出てしまった。とくに女の子が出ていった。最近、島に都会からも「嫁さん」が来るようになった。「埼玉から来た子は、どこへ出してもべっぴんや。最初は船酔いでゲロしとったのに、いまは元気に合羽着て網仕事しとるよ」。

島に新しい風が吹き出したのだ。海的环境は悪くなった、漁

獲も停滞気味、魚価も低迷している。外から来た若い嫁たちには島はどう見えているのだろうか。

### 「小木民俗資料館」を訪ねて佐渡へ

一九七三年夏。佐渡へはじめて渡った。佐渡は沖繩に次ぐ周囲二六二キロの大きな島だった。小木の宿根木にある小木民俗資料館（後に「佐渡國小木民俗博物館」と改称）を訪ねる目的であった。

二年前の一九七一年一二月、大阪万博の翌年、鳥羽で「海の博物館」をやつと開館にこぎつけた。期待して開館した博物館には入館者が少なかった。開館の記念講演会に宮本常一さんを呼んだ機会に、どうしたらいいか聞いた。

「資料を集めなさい、とにかく同じものでもいい、五万点集めると、見えてくるものがありますよ」。その参考になるからぜひ、佐渡の小木民俗資料館へ行ってみるといい、と宮



野焼き場へ運ぶ棺桶を乗せ、4人で担ぐ「ミコシ」。昭和30年代まで使われていた（佐渡國小木民俗博物館。本誌編集部撮影）。



本さんに教えられた。博物館の原点である資料を忘れていたのだった。

小木ではその資料の量に圧倒された。廃校の校舎いっばいとところ狭しと民俗資料が詰まっていた。たらい船、磯の魚介藻を獲る漁撈用具はもちろん、漁村の暮らしの道具や祭具、棺桶のような葬具まであった。国の重要有形民俗文化財に指定されているのは漁撈用具など海の資料であったが、ほかに膨大な農具類も収集されていた。その内容の豊富さ。島人たちは海ばかりでなく、取り巻く自然のすべてとかかわって暮らしてきたことを示していた。

漏らさず集めて資料館をつくった人々の執念を感じた。佐渡という島の文化に魅せられた外の研究者に刺激されたとはいえ、その土地の人々がモノの集め人であった。

その資料群は、島の豊かさを秘めていた。豊かさといっても、贅沢な暮らしをいうのではない。螺鈿や彫金で飾られた家具があるわけではない。金襴や絹の衣装にあふれているわけではない。一時期、この島は多くの黄金を生んだが、島人は恩恵を受けなかった。それでいながら多種多様な器具、道具を工夫した島人たちは日々の暮らしを豊かにしてきた。モノを大切に作り使う、暮らしを一番に考える気持ち伝わってくる。

小木で博物館のモノ集め、集積したモノから伝わる感動に、あらためて宮本さんに感謝しながら、短い時間だった

が、相川の金鉱山跡から両津へバスに乗って佐渡の平野部を見た。そこで能舞台をいくつも見た。そこには田園が広がり、加茂湖の風景があった。外海府を回れなかったのは残念だったが、この島は、素晴らしい独立国だと思った。

### ――棄てられた島「軍艦島」へ――

一九八三年八月。長崎の友人Tさんの案内で釣り船を雇い端島へ渡った。この島は軍艦島と呼ばれていた。島は棄てられてすでに一〇年を経ていた。その記憶を当時の「SOS運動」(Save Our Seaの略。「海の博物館」が始めた海を守る運動)機関誌に書いた文章から引用する。

ある夏の日この島へ渡った。肥った野良犬が一匹いた。猫も一匹いるそうだが見掛けなかった。釣り人の残飯が僅かに二匹の動物を生かしているらしい。

瘦せた雑草も多くはない。敷きつめたコンクリートが土を圧倒していた。

坑口など危険な場所は完全に閉鎖されているので、炭鉱の残姿はよく読みとれない。その上に乗る八、九階建のアパート群は、暗くしめっぽく、暗い底に僅かな光しか当たらずに庭があった。まだここに住んでいた人々の汗の臭いを発散しているようで生々しい。汚れた子どもの肌着。野球



9階建てアパートの下に小さな庭がある（軍艦島・1983年撮影）。

のバット。使えそうなやかん。壁やいたるところの落書き。一杯飲み屋の看板は奈落の入り口に並んで、傾いていた。遊郭は多分、陽のどかぬ地階にあったのだろう。では偉いさん方は、どこに住んでいたのか。小さな口の字型、コの字型をした高層アパートの南向きで海の見える大きな一室だったのだろう。もっとも彼らの親方、資本

家たちは、島へ来ることもなく都会の豪邸におさまっていたのであろうが。島の一番高い場所が神社だった。ご神体は誰かが持ち去ったのであろう。神社の前は広庭になっていて、亭主の安全と多い収入を願う女たちで引きも切らなかった様子がしのばれる。

周囲にぐるりと回されたコンクリートの厚い護岸壁は高い低いはあるが、島内側で三〜七メートル、海面からは一〇〜二〇メートルはあろうか。下には岩礁が待ち受けているから、「けつわり」と呼ばれていた脱走者は死と道づれであった。四周は海でも、浜へ降りられる場所はない。海水浴など思いも及ばぬ海であった。高いコンクリート壁のただ一ヶ所が切っただあって、船着き岸壁になっており、ここが島の唯一の入り口出口。

軍艦の中は牢獄であったのだろうか。盛時、六・三ヘクタールに五〇〇〇余人が住んでいた。それは東京の人口密度の一〇倍。さらに、採炭、貯炭、選炭などに大きな場所を取られるから、人間様の住居は狭く高くせざるを得ない。その





高層建築の廃墟が立ち並ぶ軍艦島の全景・1983年撮影。

ため、すでに大正五年から、鉄筋コンクリートの高層ビルが建てられたという。廃島時、そんなアパート群は二一棟、八九五世帯分を数えた。

石炭以外の生産品は皆無。水、食糧、衣服、住居用資材。電気と熱源を除くにもかもが船で島外から持ち込まれていた。いのちの水が野母崎半島から海底給水管で送られるようになったのは、島が棄てられる一七年前でしかない。それ以前は一人一日五〇リットル以下の水で、汗まみれ泥まみれの労働者は暮らしていたと記録にある。風呂などろくに入れない量にすぎない。

朝も三時から 弁当箱下げて 坑内降りるも 親の罰  
どんどん

「昭和二年の賃金は日給が坑内五〇銭、坑外四五銭、帝大出の月給三八円。工專出が三二円の頃である。自分（久光）の小さい頃の大正時代は納屋制度が残っており、給料は土曜日ごとに親方からもらい、親方は酒二合とおかずを作って、その分は給料から引かれたという。遊郭（島には七軒営業。女性は三〇人位いた）へ行くにも親方の印判をもらわないと行けなかった。正月には親方は紋付きを作らせて金を取り、鋤夫は苦しくて逃げようにも、借金で逃げられなかった。」（長崎・年輪）と、大正二年生まれの田中久光老が語っている。

納屋制度というのは、人夫の募集と監督を特定の「請負

人」を定めて任せる下請け制である。

「一週間に一度の開放された休憩の日に、一升徳利を据え、飯茶碗になみなみと冷酒を注ぎ沢庵漬けを肴に、酔いをむさぼる者や綿のはみ出した煎餅蒲団を畳み、それを囲んで花札をくり博打を打って楽しむ姿を目撃したが、又酔眼もうるうとした人相の悪い男がその仲間の一人と口論の末、斧や鋸などを振り回し、或は出刃、あいくちなどをさか手に持って半狂乱のように相手構わず、切りつける様や、日本刀をふりかぶり互いに斬り結び遂には頭を割られ、肩先を斬られ、血達磨となつて医師のもとへ担ぎ込まれる」(『高島町文化史』)。そんな出来事は日常茶飯に繰り広げられる荒れた光景であった。

その上ながなんでも増産をしいられていて、さらに、金のかかる坑内の安全対策は最小限にとどめられていたから、火災、落盤、出水による事故は頻発し、死亡者はあいつたかかわらない。昭和四九年廃島となった時、「坑内事故などで死んだ二一五人のめい福を祈つて黙とうをささげた」(長崎新聞)とあるが、たぶんその数は事実とは遠いことであろう。直接の事故での死は悲惨であったが、炭塵やばい煙に肺を冒されて、のたうって死んだ者はより悲惨であり、コンクリートの牢獄の中で金と力で生きる権利さえ買い取られて狂い死んだものは地獄であった。

敗戦後の軍艦島にも「民主主義」が少しずつ入ってきて「地獄」は姿を消した。学校も出来、水も来て、文化も相應に落ちてきた。

翌日、今も細々と採炭を続ける高島——端島の北にある離れ島——役場を訪ねた帰り、真夏の太陽がギラギラ照りつける高層コンクリート・アパート群の間を歩いていると、突然「ウオー」と獣の叫びが聞こえた。もう一度「ウオー」



本稿で取り上げた島々

と聞こえた。周りには人一人いなかった。誰の叫びか、ついにわからなかったが、アパートのいくつかの窓には嚴重に金網が隙間なく張られていた。わたしは聞いてはならぬ声を聞いた気がして、そこを小走りに通り抜けるいたたまれぬ経験をした。

昭和四九年一月一日、「名残り惜し軍艦島 三菱端島 碇・操業八四年・ついに閉山式」。長崎新聞は当日の様子を伝えている。

「サヨナラ ハシマ」の人文字が運動場にくつきりと現れた。軍艦島で知られる三菱石炭鉱業高島鉱業所端島鉱が一五日の閉山式でついにヤマの灯を消した。

石油危機でにわかにならぬ「石炭見通し」がクローズアップされているなかで、同島は採掘可能な石炭を掘り尽くして、「天寿を全う」。この日限りで八四年間の歴史に寂しく幕を下ろした。「島は天寿を全う」して棄てられるが、ヤマの男たちは島の天寿を祝うて棄てられていった」

その後一〇年、軍艦島を去った人々は何処で幸せに暮らしているのだろうか。消息を知るすべはない。

最近の報道によって、軍艦島の関係者が世界遺産の登録を目指して運動をはじめた

### いしはら よしかた 石原 義剛

1937年三重津市生まれ。1960年早稲田大学文学部卒。1971年鳥羽市に「海の博物館」を開館。現在に至る。専攻は近代漁業史、漁村民俗、博物館学。著作に『伊勢湾一海の祭り港の文化―熊野灘を歩く―海の熊野古道―』（風媒社）。

と知った。それはいいことだ。日本群島の繁栄と凋落の経過、今たどりつつある日本という国の未来の姿を現実に、眼前に見ることのできるかけがえのない遺産として。

### 大崎上島、素晴らしき船こぎ競漕

鳥羽の市役所に、「潮騒クラブ」という船こぎ競漕の若い仲間の集まりがあった。広島県因島の大会で、彼らは大崎上島にある東野町の若者たちと出会って船こぎの技術を教えてもらった。じつは、この島には伝統的な船こぎ競漕の祭りがあったのだ。大崎上島には、今は島中が合併して一つの町になっているが、このあいだまではほかに木江町と大崎町があった。木江には今も大きな造船所があるように、島の住民の多くは内外で造船に従事してきた。そんな歴史を伝えるように船こぎ競漕の伝統が受け継がれてきたのであろう。

盛時、八月一五日の祭り日には、一〇数ヶ所から競漕に参加する船のチームがやってきたという。

わたしはその島をはじめて訪れたのは二〇〇一年であった。前日、島を訪れた時、船着き場で船を入念に手入れする若者たちのチームを見た。一人の偉丈夫な老人が怒

鳴っていた。「やり直せ」。裏返しにした船底を油で黙々と磨く若者たちがいた。真夏の長い日にかかわらず、もうお日様は沈みかかっている。どの船も明日の準備を終えていた。

船こぎ祭りは「住吉祭」が正式な名である。朝八時、海に面した住吉神社に全員が参列して祭礼がおこなわれた。神社の前の海から競漕ははじまる。その年の出漕艇は島の西側六地区に減って六隻だった。六地区の前の海域で競漕が行われ、勝った回数で総合優勝が決まる。漕ぎ手は一六人、大櫂と采振りを加えて一八人。地区の名譽を賭けて戦う。梶の役目を果たす大櫂の技が、勝敗を大きく左右する。潮の流れ、強さ、風の向き、他艇の位置などを読み取りながら、コース取りを巧みに変える。しかし、なんといつても勝敗を決めるのは乗り組む全員の心が一つになることだと誰もがいう。

岸壁では大勢の観客が声援をおくる。若い女の子が集まるところでは船は早くなる。一競漕終わると岸や応援船から祝儀袋の「花」が漕ぎ手に配られる。

この日ばかりは、島は船漕ぎ一色に湧きたつ。昔は参加



権伝馬の行われの「住吉祭」のはじまり（大崎上島）。



夕方までつづく権伝馬競漕（大崎上島）。

地区が多くて島中が湧きたつたものだ、と船こぎを取り仕切る長老が寂しそうに語る。それでも島は祭り気分の子どもたちも浮き浮きしているのが分る。

この日、最終レースは西日の傾き赤く染まりだすころ、沖の岩礁を回る競漕を終え、島のもう一つの神社・巖島神社の岸へ戻ってきた。その夜はいつまでも若者たちの歓声が消えることはなかった。

この後、海の博物館は、島から船こぎ競漕の船をはじめ四隻の木造船の寄贈を受けた。なかに長さ一メートル、幅五〇センチほどの「サンマイ」と呼ばれる可愛い船がある。島の子どもたちが遊びに使う薄板張りの箱船だ。よく海に浮くものだと思う。子どもたちは小さい時からこんな小船で海に馴染んでいくのだ。

## 八月踊りの奄美大島へ

二〇〇二年、奄美大島へ渡ったのは、島のあちこちで催されている船こぎ競漕を見たかったのと、使われる船を調べたかったからだ。真夏、八月に入ったばかりの奄美はまさに南国であった。奄美博物館を訪ね、この島のイタツケ、アイノコなどとよばれる船に関する資料をもらい、船大工の坪山豊さんを紹介されて話を聞いた。

次の日は早朝からレンタカーで島を隈なく回った。海岸線のどこを走っても人をほとんど見かけない。古い木造の民家が多い。田中一村描く、シダやソテツの風景がどこにもあって、草木と虫と鳥の音ばかりがあった。



名瀬に戻ると、そこだけに賑わいがあった。いくつかの集落で広場に人の集まりを見た。舞台があり、次々と島唄が唄われていた。唄っていたのは昨日会った船大工の坪山さんだった。彼は島で知らない人のない島唄の名人だという。

次の日の朝、名瀬港の奥の岸壁をコの字型に陣取ってテ

海岸にあった小舟「アイノコ」  
(奄美大島)。



名瀬の船こぎ競漕（奄美大島）。

ントを張り、大勢の島人が思い思いに席を確保し、もう御馳走を広げている。九時には船こぎ競漕ははじまっていた。昨日見た地区の競漕の船がほとんどFRP製のなににいささかがっかりしていたところ、大会の船が木造船だと知ってうれしかった。七人で漕ぐ船は約二〇〇メートルの距離を往復する。ターンする技術が勝負に大きく影響する。村や

地区の代表チームが競っているらしい。ひと勝負あるたびに歓声のため息が交錯した。朝から昼へ、昼から夕刻へと時間が経つにつれ、観衆の興奮が高まる。決勝戦は太陽が傾くころになる。一日中が船こぎ競漕で港は湧く。

その夜は花火大会。一時間で五〇〇〇発を打ち上げるのが島の自慢だと聞いた。あつという間で花火が終わったあと、居酒屋で黒糖焼酎を飲んだ。鶏飯けいめいが旨かった。鶏肉、卵焼き、シイタケを細く刻んで、ご飯に熱いだし汁を掛ける奄美の茶漬けだ。

最後の夜は人々が爆発する。「八月踊り」。島の中心都市・名瀬の市街中心部は車通行禁止。歩行者天国ならぬ、「踊り人天国」になった。道の真ん中に焼酎の樽が据えられ、その周りに踊りの輪が幾重にもできる。焼酎が道行く人に誰かまわず振る舞われる。

狂気のような八月の数日、島人は爆発する。明日からは静かすぎる日々が戻る。

奄美大島は佐渡に次ぐ大きな島で、住人数約一〇万人。琉球列島弧の中ほどに位置する。

## 八丈島に遊ぶ

二〇〇八年。東京から南へ二八七キロ。海の上を三〇分も飛んだ飛行機は瞬く間に八丈島空港に降りた。可愛い空



港だ。この旅は久しぶりに目的のない遊びの旅だったから気が軽い。

「ひよっこりひょうたん島」のモデルになった周囲六〇キロほどの島。東に三原山、西に八丈富士、その二つの山の間が、わずかな平地。人口は八〇〇〇人だと聞いた。この島が「流人の島」として知られるのは黒潮の位置だと、ここに来て確かに判る。ここは時速二マイル以上の速さで北へ流れる黒潮の南、外側なのだ。

流された者から見れば八丈島は本土から遠い、帰り得ぬ島であろうが、そこで生まれ育った者から見れば、我が土地であり、我が国であった。「流人の島」とは島のよその人のいうこと、八丈島は「独立国」そのものである。

島には米を作れる土地が少ない。甘藷がはいったのは江戸期だから、それまで食糧には相当な苦勞があった。そのことが「流人の島」を強く印象づけることになったとおもわれる。

八丈島の食文化は特異だ。だいたい今日見られるような形は明治期以降だろうが、島外からの「移入と改良」による食文化なのだ。「島寿司」は東京でいうズケ。島唐辛子をいれた醤油に、魚の種類によって三〇分あるいは六〇分と時間を変えて漬け込む。マグロだけでなく地魚が豊富なのがいい。「島酒」とは焼酎だ。鹿児島からの渡来人が技術をもたらしたという。八丈富士の中腹は牧場で、いまは



玉石垣のある道（八丈島）。

観光牧場だが、早く森永乳業のバター、チーズなど乳製品の主生産地だったという。

食だけではない。有名な黄八丈こそ、この島で改良に改良を加えて完成された、黄色を基調とする誇り高い織物なのである。海岸にいくらでも丸い石を美しく積み並べた玉石垣も、持ち込まれた石工の技である。

源為朝の伝説が面白い。保元の乱で殺されたはずの男がここで復活し、島を本拠に大活躍する。この御仁も本土からの移入人で、やがて島の誉れとなっていく。確実な高貴流人の第一号は、関ヶ原の戦で敗れた宇喜多秀家という。宇喜多一族は、何度も帰る機会があったにもかかわらず明治維新まで島に留まっていたらしい。島の外からさまざまな文化が持ち込まれて、島のモノになっていった。島に立てば、島が世界の真ん中である。

この島の天気は変わりやすい。大洋のと真ん中にありながら、いつもどこかに雲を被っている。したがって水に不自由しない。都会のコンクリート・ジャングルが廃墟と化した暁にも、この島だけは悠然と生きて行くであろう。

## ——まだ続く島々の旅

日本列島はまさに群島である。島には大小があるし、島の位置も異なる。平地の有る無しもずいぶん違いがある。

水の有る無しは陸と続く海の動植物の生息を左右している。要するに島ひとつずつに特徴がある。

人間の住める条件は水と食糧と気温であろう。全部が揃った好条件の土地、肥沃の大地が地球上にどれほどあるだろうか。そんな島があるだろうか。かつて人間はそんな理想を求めて地球上に島を探し続けてきた。

結局、どこにもすべてが充足した理想の土地はなかった。そこで人々は分かち合うことを学んだ。交換することも学んだ。ときには奪い合うこともあったが、島の面白いところは、分かち合いながらもそれぞれが独立を保てるところにあった。

多くの小島に住む人々の気質には似たところがある。外へ向かう冒険心と、内に籠るいわゆる島国根性、この二つの相反するように見える気質。海の彼方へ乗り出して行くこととする気持ちと、海を守りの壁として内に籠ろうとする気持ち。海に対する怖れと感謝、荒れ狂い命を奪う海、一転して静かに豊穡をもたらす海。海の示す二つの顔が島人の気質をつくるのか。島の気質は、当然、日本群島の気質をつくっているものだ。

島から若い人が出ていくので、多くの島はいわゆる過疎化が進んでいく。それを見て島は間もなく無人化し、滅びるといふ人がいる。そうなるだろうか。